



▲ワンピッチジャークで青物を狙うヨッシー

青物の反応があるまで スピードを変えながら ワンピッチジャークで誘う



▲浅場では前方にキャストして斜めに引いてくる
▼巻くスピードを変えて緩急を付けて誘うのも有効



クルの両方を持ち込むことが多い。ジギングでの縦の釣りを基本として、ナブラが湧いたり表層に雲囲気が出たときにはナブラを投げる。

しかしこの日のヨッシーはキャストイングタックルを持たず、ジギングタックルだけだった。もちろん、諦めではない。むしろ逆の、攻めの姿勢だった。「なんとなくの雲囲気ではないんだけどさ」とヨッシー。「チャンスが少なそうなきほど、どっちかに絞ったほうがいい。そりゃあナブラがボカンボカンと湧きそうならキャストイングタックルも持ち込むよ。でもそういうときは、ジギングでも釣れるからね。」

ジギングにしてもキャストイングにしても、その釣りをやり切らないと、何が正解かわからない。だったら、少しでも釣れる可能性が高いほうに絞ったほうがいいでしょう」

港を離れてから1時間。戦いが始まったのは、午後1時ちょうどだった。水深は37メートル。150グラム前後のジグを着底させ、素早く底を切って根掛かりを回避してから、ワンピッチジャークをする。

「反応はあるよ。底から10メートルぐらいまでかな」

指示どおり、底から10メートル付近までワンピッチジャークをしたら再びジグを着底させる。ジギングの基本動作を何度か繰り返したE2F取材班は、黙って顔を見合わせた。

「ヤバイかも……」

ヨッシーがつぶやいた。金属の塊を上げ下げするジギングは、意外にも潮の様子が分かりやすい。潮を受けると抵抗が増し、重みとして伝わってくるからだ。

指示どおり、底から10メートル付近までワンピッチジャークをしたら再びジグを着底させる。ジギングの基本動作を何度か繰り返したE2F取材班は、黙って顔を見合わせた。

「ヤバイかも……」

ヨッシーがつぶやいた。金属の塊を上げ下げするジギングは、意外にも潮の様子が分かりやすい。潮を受けると抵抗が増し、重みとして伝わってくるからだ。

ヒラメラッシュで盛り上がる中 青物が口を使ってくれない!?



▲船中初ヒット。注目される中、慎重にヤリトリするイチロウ

しき美点である。チャンスが多い釣りではないが、だれかにそのチャンスが訪れたときには全力で応援したくなるのだ。

不思議なもので、悔しさは微塵もない。逆に、「自分にもチャンスがやってくるかもしれない」

「スカスカじゃない……?」

ワンピッチジャークを繰り返しながら、再びヨッシーがつぶやく。潮の流れが感じられないのである。

神出鬼没で気まぐれな青物に勝負を挑むのは、もともとが不利だ。そこに水温低下と潮の流れのなさが加わって、ますます不利である。

しかし、しあき丸に乗り込んだ戦士たちは、だれ一人として諦めてはいなかった。

吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.09

外房のルアー青物

文◎高橋 剛／撮影◎本誌編集部



★ブリ、カンパチ、ヒラマサ……。神出鬼没の青物を狙う、外房大原港のしあき丸。「ルアー青物は、ハイリスク・ハイリターンだからね」と覚悟のうえで船に乗り込んだヨッシー。もちろん、負けるつもりなど微塵もなかった。そして「絶対に勝つ」という強い気持ちで、釣果を引き寄せた!と感じながら、こだわらないことの強さを見つけた。

勇者である。猛者とも言える。賢者ではないけれど、間違いない愛すべき存在だ。

11月21日、お昼前。外房大原港・しあき丸の船着き場に集結した者たちは、だれもが一緒にいいツラ構えをしていた。間もなく始まる勝負に対して静かに意気込んでいる。

厳しい戦いになることなど、最初から分かって切っているのだ。敵は外房の大海原を自由自在に泳ぎ回っている。神出鬼没で、しかも、ひどく気まぐれだ。

昨日までの釣果は、ほとんどあてにならない。明日の釣果もほとんど読めない。今、このとき、この瞬間しかない。ルアー青物は、そういう釣りだ。

きつと負け戦になるだろう。それでもきたるべき大物に耐えるゴツイタックルと決して折れない心を携えた戦士たちは、果敢に船に乗り込み、海へと乗り出す。いつ訪れるかもしれない栄光のときを夢見て。

「この釣りが好きなんスよね」と微笑むのは、しあき丸の松崎好昭船長だ。名が「よしあき」で、ニックネームは「しあき」。それがそのまま船名になった。

同じ大原港のあまみ丸で、仲乗りとして、そして船長として経験を積み重ね、今年6月に

独立。ルアー青物を中心に据えながら、ヒラメ、一つテンヤマダイ、そしてマダコなど多彩な釣り物で遊ばせてくれる。

「自分は今もともとバスフィッシングが好きだから、ルアー釣りの魅力は十分に分かってます。船としてもルアー釣りを盛り上げていきたい。」

でも、エサ釣りにはエサ釣りの面白さがあるんスよ。お客さんには、どっちも知ってほしい。ルアー釣りの人はルアーしかやらない、エサ釣りの人はエサ釣りしかやらない、という傾向が強いけど、オレとしてはすげえもったいないな、と思うんス。

短い実釣時間で答えを出すため
ジギングのみで勝負する

ドッドドッド……。

外房にしては非常に珍しいベタナギの海を、しあき丸は進む。快晴だが、しあき船長の表情はどんよりとシブい。

「4日前に南南西の爆風が吹いたんスよ。それですっかり水温が下がっちゃって……。24度ぐらいあったのが、見てくださいよ、今は20度ツスからね。仲間の船に聞いても、青物が全然口を使ってくれないって。」

なんでこんなときに取材なの

かなって思ったツスよ……」

秒速30メートル近い南南西の風が、外洋の冷たい海水を灘へと押し込んだのだ。水温が下がると青物の活性も下がる。苦笑いするしかない、しあき船長なのである。

しかし、この男はまったく諦めてはいなかった。ジャッカルプロスタッフのヨッシーこと吉岡進さんである。

ルアー青物船へは、ジギングタックルとキャストイングタックル



▲釣りは大原沖の水深15～50メートル前後。ドテラ流して探っていく



●120グラムのセミロングジグ、グロウ入りのカラーをチョイスして3.1キロのサンバク(イナダとワラサの中間サイズ)をキャッチしたヨッシー

シブい中でも
魚に口を使わせ
られたのは、
ジグの性能が
あってこそかな

でもルアーは、本来なら魚が食わない金属をどうにか魅力的に見せて、食いつかせないといけない。だから色んな工夫が必要なんですよ。

そしてそういう工夫って、実はエサ釣りでもすごく大事。これはオレの個人的な意見だけど、ルアー釣りができる人はエサ釣りもうまい。それは、いつも工夫するという姿勢が身に付いているから。だから状況に合わせて臨機応変に対応できるんよな。その日ごとの変化を感じて、その日に合った釣り方を見つける。ルアーでもエサでも、そういう釣りを楽しんでほしいんよ。

「……んっ！」と声を上げたヨッシーは、まさにしあき船長が言ったとおりに、様々な工夫を凝らしていた。

スリリングなヤリトリの末に上がってきたのは、丸まるとしたサンバク。ブリの中でもイナダ以上ワラサ以下のサイズを指す、外房の呼び方である。

「早めのワンピッチジャークでアピールしてから、フツとスピードを落として食わせの間を作ってたんだ。

食ってこないから、落とし直してゆっくりめにトーン、トーンとワンピッチジャークをしていたら、5シャクリ目でズドンときたね。

ヨッシーのメモリアルショット



●東京湾のキャストイングのサワラゲームやビッグベイトのシーバス釣りをポートキャプテンとして連日のようにガイドしているヨッシー。忙しいときでも合間に食べられるゆでたまごがマイブームとか。腹持ちがいいので空腹を満たすのに適しているし、タンパク質なども摂取でき栄養もある。つまり、釣りでのエネルギーチャージにピッタリなのだ。



▲お気に入りのメロンパン。ちなみに大原のデイリーヤマザキで購入

がよかったんだと思うよ」

もちろん、それだけで勝者にはなれない。自分なりの戦略を立て、「今日はこの釣りでいく」と絞り込み、状況に合わせて臨機応変な工夫を繰り返す……。

17時過ぎに港に戻ると、すっかり暗くなっていた。キツチリと結果を出したヨッシーは、お土産にいただいたダイコンをぶら下げて、颯爽と大原港を去って行った。

カッコいい……。明日の自分はあるであらう……。明日の自分だれもがそう夢見て、また船に乗る。ルアー青物の魔力だ。



5シャクリ目で
ズドンときたね



▲ゆっくりなワンピッチジャークで青物がヒット

▶同船した皆さんに見守られる中、3.1キロのヒラメをキャッチ



▲カサゴも釣れた

と希望が持てる。ワンピッチジャークに今まで以上に力を込めつつ、イチロウのヤリトリに注目する。

しあき船長が差し出したネットに収まったのは、3.1キロの見事なヒラメだった。

「着底から1メートルは早巻きして、大きめのワンピッチジャークをしてたんです。2回目のジャークでロッドをリフトさせたときにズドン！ いやあ、気持ちいいッスね！」

満面の笑みを浮かべるイチロウなのである。

イチロウの言う「ズドン」は、ルアー青物の魅力そのものである。魚がジグに食らいついた瞬間の、根掛かりかと思うような

ズドンという重おもしろい手応えは、PEラインを通じて生命の力強さを感じさせてくれる。

青物ならそこからさらに猛烈に走ってスリリングだし、ヒラメや根魚もズッシリとした抵抗感が楽しい。

ライン1本にジグを付けるだけ、という極めてシンプルなジギングは、魚の引きをダイレクトに伝えてくれる釣りだ。

「青くないな」

「茶色だね」

「平べったいし」

口さがない仲間たちがからかいながらも、船中の全員がホツとしていた。とりあえず魚の顔が見られたのである。

チャンスはわれにあり……！

まさにイチロウに続けとばかりに、左ミヨシと左胴の間でヒ

浅場に移動していい雰囲気 スローなジャークでズドン

しあき船長は、釣り人の様子をしながら積極的に、そして優しく声をかける。中でも「色いろやってみてくださいね」というアナウンスは印象的だ。

「釣れないときに、同じことをやり続けるだけじゃ釣れないですからね。ジグを替えたり、ジャークのやり方を変えたり、色んなことにトライしてみてください」

工夫こそが、ルアー青物のいい味だとしあき船長は言う。

「エサ釣りの人は、エサさえ付いてれば釣れるだろう、と思ってる人が多いんすよ。エサなら放つておいても魚は食うだろうって思ってるんでしょね。」

その8分後、「んっ」と静かで力強い声を上げたのは、ヨッシーだった。

「水深は15〜25メートル。浅場です。ここは最近、船長が大物をバラしたポイントですよ……」

しあき船長のアナウンスが、釣り人のモチベーションを沸き立たせる。

その8分後、「んっ」と静かで力強い声を上げたのは、ヨッシーだった。

「あー、よかった」とひと息ついたしあき船長だったが、「青物がねえ」と緊張を解かない。

「反応はあるんすよ。でも、ジグを嫌ってるみたいで、ジグを落とすとパアッと散っちゃうんすよね……」

ポイントを変える。ルアー青物は釣り人の戦いであり、船長の戦いでもある。

14時15分、船を止めた。

「水深は15〜25メートル。浅場です。ここは最近、船長が大物をバラしたポイントですよ……」

しあき船長のアナウンスが、釣り人のモチベーションを沸き立たせる。